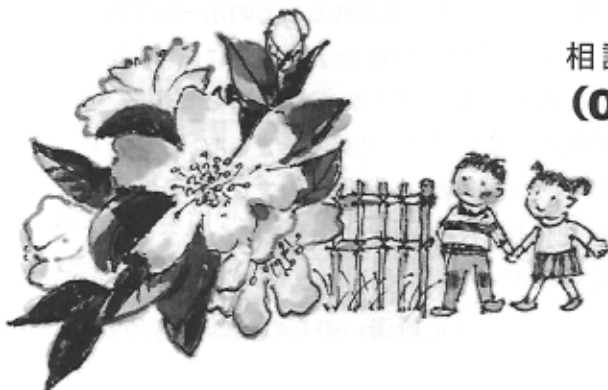


# 聴く

新潟いのちの電話だより

2013.11

No.119



相談電話

**(025) 288-4343**

上越(025) 522-4343

長岡(0258) 39-4343

新発田(0254) 20-4343

村上(0254) 53-4343

## 世にも不思議な物語～炉端の昔話～(2)

萩屋マサ子

開局当時といえば、もう30年以上も前のことです。その経緯は、「新潟いのちの電話」の広報紙「聴く」や各年度ごとの「事業案内」に加えて、節目ごとに発行されてきた小冊子で丁寧に紹介されています。私が話す苦勞話は、たまたま事務局という立場に居た、極めて個人的な体験を通して感じてきたものです。

最初のセンターは、書店の3階の一室を借り、2台の電話機を設置した小さな相談電話室が2部屋と相談員のケアと指導を兼ねたスーパービジョン室、相談員が待機する休憩室、事務机だけの事務局でした。防音壁の取付けや、顔の見える素通しガラスの仕切りなど、細かい注文にも損得ぬきで協力してくれた職人さん達のことも忘れられません。間取りや設備に不十分さはありましたが、「相談電話」の第一声はこの場所で受け取られたのです。

間もなく2階の一室も借りることができ、研修室、会議室、応接室、事務局として整備されていきました。そのために必要な日用品や事務機器など、殆んどが持ち寄りの寄附によるものでした。研修室といっても50人近い受講生とスタッフで、坐ったら最後、誰一人移動できない状態でした。必要な机も椅子も近くにある教会から、その都度、借用、運搬、返却の繰り返し作業でした。みんなよく働きました。向いのお店からは、昼も夜も名物の「イタリアン」をあきもせず、よく食べていました。事務局の玄関前の清掃、冬の雪かきなど、黙々と引き受けてくれる人も居ました。狭いながらも活気に満ちた場所でした。

10年余り過ぎた頃、旧県社会福祉会館に移転しました。古い建物とはいえ、いままでの10倍近い広さと単独入居は、まるで一城の主にもなったかのような開放感がありました。100人近い人が一堂に集まれるほどのホールでは、時代の問題に関心を持ってもらうための講演会や研修会を次々に開くことができました。相談員の訓練も10人程のグループで個室を持つことができ、「相談電話室」もゆとりを持って相談に集中することができました。張り詰めた緊張を癒してくれた休憩室には、いつも茶菓の用意がありました。この場所を買い取りたい、法人化のための基金1億円も集めたい、夢のまた夢を実現しようと、信じられないほど、みんなの力がいろんな形で動き始めました。

(元新潟いのちの電話事務局長)

## ある日の相談室より

「職場のことで相談したいんです」震えるような細かい声で、その方は話し始めました。

「社員が20人くらいの小さな会社なんです。1年前に中途採用で入社したんですが、なかなか雰囲気になじんでいない感じがして。前に勤めていたところでは、パソコンを苦手にしていました。でも、今のところではそんなことも言ってもらえないと思って、なんとか頑張っていたんですけど、それにも限界があって。だんだん夜も眠れなくなってきちゃったんですよね」1週間くらい眠れない日が続き、上司に相談したところ2週間ほど休むことになったと言います。



「休みが明けて入社する時に、まわりの人がどんなふうにいるのかが、とても心配だったんです。でも、思ったよりも悪い感じではなくて、パソコンのことについても、まわりの方から声をかけてもらえたんです」おとなしくて一人で黙々とやるタイプなので、今回、自分から上司に話をして、いろいろ配慮してもらったのは、とても良かったと話します。

「ただ時間が経つと、まわりから声をかけてもらうのも少しずつ減っていきますよね。そうすると、また自分だけでなんとかしなくちゃと思って、今また無理を続けてしまって。ちょっと苦しくなってきました」

「やっぱり、まだ入社して1年だし、なんとなくなじんでいないと思うから、どうしても遠慮がちになってしまうのかな。でも、一人で考えてあれこれ悩むより、上司に相談した時のように、自分から話してみればいいのか、どうしてか。自分の中の遠慮の虫に負けないでやってみます」力強い言葉にほっとしながら受話器を置きました。



(内容は、電話を基に構成し直したものです)

毎月10日(午前8時より翌日午前8時まで)は  
フリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」が実施されています。  
電話番号 0120-738-556

## チャリティーバザー（後援会）

田村 貫次郎

十数年前、高校同期の眞壁伍郎君（元理事長）より、後援会に入るよう要請があり、「新潟いのちの電話」の内容も深く考えず、承諾しました。この時一緒にいった人物が、同じく同期の敬愛する友 故 渡辺富二雄君でした。

はじめは、名前だけ連ねて、時たま、会合に顔を出せばよいのかなと考えておりましたが、そうではありませんでした。資金作りのため、バザー、ピアノリサイタル、朗読会、講演会の開催の手伝いと入場券の販売。広報では、榎谷小路（古町）で「PR」紙を配る等、役員自ら参加されるのには感心しました。



↑今年バザー会場に鈴虫も

特にバザーの準備は、3～4ヶ月は掛かります。会場確保、案内発送、寄贈品集めとチェック、そして値付けは、以前に比べて、少人数で作業せざるを得ないのが現状です。

前日は、会場設営、床のシート張り、展示用机、椅子の移動、寄贈品の搬入。当日は来客との応対、売上金管理、集計、そして後始末です。

これだけの規模のイベントを27年間継続できたのは、歴代リーダーの統率のもとに、事務局スタッフ、役員、会員やそのご家族、友人の方々の絶大な協力と“きずな”があったからこそ、結果が出せたものと推察します。

今年の第27回目のバザーは昨年に引き続き、新発田支部の皆さんと「えぶろん」さん、「NSG新潟総合学院」の学生さんの応援があり、元気付けられました。



↑大勢の人でにぎわったバザー会場

しかし昨年に比べて、寄贈品は、少なくなりました。

今後、大ロスポンサーの開拓を心掛け、やや高齢化している実行委員会に「若い力」の注入が課題と思います。

（新潟いのちの電話 後援会理事）

## お知らせ

### 公開講座

(自殺予防いのちの電話 会員の集い)

■講演1 大野寿子氏

「寄り添うということ」

(メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン事務局長)

■講演2 岡山慶子氏

「あなたには、明日、生きる意味がある」

(NPO法人キャンサーリボンズ副理事長)

■対談 大野寿子氏×岡山慶子氏

「明日を生きる」

日時 2013年12月6日(金)

午後6時30分～8時30分

場所 だいしホール

(新潟市中央区東堀前通7)

駐車場はございません。

※厚生労働省の自殺防止対策事業です。

※入場無料です。どなたでも参加できます。

当日直接会場へおいでください。たくさんのご来場をお待ちしています。

### 32期ボランティア相談員募集

相談員の数不足しています。一緒に活動して下さる方を募集しています。

申し込み期間

2013年12月1日～2月15日

研修期間

2014年4月～翌年3月まで1年間

毎週木曜日 午後6時30分～8時30分

年齢 23歳から66歳まで

受講料 年間3万円と一泊研修の実費

募集要項など、詳しくは「新潟いのちの電話ホームページ」をご覧ください。か、事務局にお問い合わせください。

### クリスマス・歳末募金のお願い

6月の会費の納入に

続いてのお願いです。

恐縮ですが、

みな様のご協力を

どうぞよろしく

お願いします。



### ご支援に感謝

後援会の方々をはじめ、たくさんの方々のおかげで、「こころの健康セミナー」「チャリティーバザー」は、好評の内に終わりました。

今年も大勢の方々のご支援、ご協力に支えられ、いのちの電話の活動を続けることができましたことに、感謝申し上げます。



「こころの健康セミナー」は、いずれの会場もたくさんの方において頂きました。

2013年11月26日発行

社会福祉法人 新潟いのちの電話

〒950-0994 新潟市中央区上所2-2-3 新潟ユニオンプラザ ハート館

事務局 TEL (025) 280-5677 FAX (025) 280-5677

ホームページアドレス <http://www.ni-denwa.jp/>

## 人生の秋

わたしは この一年をどうすごし  
その実りは どうだったのか？  
秋は わたしたちの人生にも  
おなじ問いを 投げかける

著名人は 本をあらわし  
評判になっても まもなく忘れられる  
忘却は すべてのものの宿命だ

わたしたちが この世を去り  
2、3世代のあとともなれば  
わたしたちのことを知るものは  
もう だれもない

では このわたしたちのことは  
だれの記憶にも のこらないのか  
このにがい思いが つきまどう

ふと見あげる 秋空に  
思いは 高くひきよせられる

ああ 天が見ているのだ  
地上で おぼえるものがなくとも  
天は わたしたちの愛と苦しみの  
ひとこまひとこまを 見ている

残るのは 偉業や名声ではない  
苦しみつつ 愛した  
その愛こそが 天におぼえられ  
のちのひとのなかに 生きつづける